

標題 「まちづくり」は「ひとづくり」

氏名(所属) 株式会社サポート 大山 寛子

0. 「ひとのためのまちづくり」

当社は、「まちづくり」という手法で「ひとづくり」をしている。今回発表する北鴻巣地区では毎月の公園整備イベントを通じて、地域が主体となってまちの自主管理を行っているが、ここで行われているイベントとは、ただの祭や賑わいを生むものではなく、その名を借りた協働作業だと我々は考える。協働作業(イベント)で生まれる助け合いを通じて、互いに能力を認め合うことが住民の自立となって自主性を育てており、「まちづくり(まちの自主管理・協働作業)」による「ひとづくり(住民の自立)」が実現されている。

また、協働作業(イベント)を継続させることで、それが行事となり、いずれは文化となり、持続可能(サステナブル)なまちをつくっていくとも考えている。戦後の人口増加によるインフラ整備重視のまちづくりの時代は終わったと感じている。我々は、これからのまちづくりを「ひとのためのまちづくり」と捉え、協働作業(イベント)等の「コミュニティのインフラ整備」に注力すべきと考えている。

本論文の主旨は、以上のような当社の考えに基づいた、新人社員である私の北鴻巣地区(すみれ野)における実体験である。

1. 北鴻巣地区(すみれ野)概要

1) 地区の概要

本地区は、北鴻巣駅西口土地区画整理事業(平成17年12月～平成23年3月完了)により、新たにつくられたまちである(9.3ha)。当社は土地区画整理事業のコンサルタントとして本地区に携わり、造成後もまちづくり事業の一環として、NPO法人によるまちの自主管理活動をサポートしている。

2) まちへの思い

土地区画整理事業の計画段階から、住民はまちの在り方を考えてきた。新旧住民が共に笑顔で住み続けていくことができるまちでありたい。その願いは「花とおはなしできるまち」というテーマと、具体的なコンセプトとして言葉にされた。また、言葉を実現するための具体的なステップを打ち出した。項目は以下のものである。

○ 4つのコンセプト(共通の考え方)

- ①花と緑と共に育つまち
- ②ひとや世代の交流があるまち
- ③一人ひとりが主役参加するまち
- ④ルールがつなぐ安心のまち

○ 7つの思い(具体的なステップ)

- ①花と緑を看板に
- ②いきもの・ひと・景色を育てる
- ③「よりどころ」をつくる
- ④健康になる
- ⑤借景し合う
- ⑥「つなぎ人」になる
- ⑦文化を育てる

これら「7つの思い(具体的なステップ)」が実際の生活シーンに現れるような取り組みを行うこと、そしてそれを続けることで、人のつながりを基盤につなげていくまちづくり(持続可能なまちづくり)を目指している。

3) NPO法人設立と目的

本地区では行政主導ではなく、行政支援のもとに、地権者・住民が積極的なまちづくり事業を展開してきた。その代表的な実例は、「NPO法人エリアマネジメント北鴻巣」(以下、NPO北鴻巣)の設立である。当法人は、まちなみ景観の維持管理・運営を通して、持続可能なまちづくり等を促し、周辺地域も含めた地域全体の永続的な発展に寄与することを目的としている。自分たちで自分たちのまちを運営することで、人のつながりを生み出すまちを目指す組織だ。

設立の発端は、まちづくり事業の開始時に、たった5人の花の好きな婦人によって結成された婦人部会だった。それがまちづくり部会を経て成長し、当法人が設立された。現在は正会員(運営に従事)26名と、300人以上の一般会員(活動参加)で構成されている。

2. 現状

1) 現在のステップ

現在、まちづくり事業を進めて6年が経過した。本地区の現況を、先述の「7つの思い(具体的なステップ)」

によって検証してみると、5番目の「借景し合う」という項目までは実現しているように感じられる。以下では、各項目が実際の生活シーンに具現化されている様子と、それを生み出すための仕掛けについて述べる。

まず、本地区の中心部には、濃密な花の彩りを持った「すみれ野中央公園」が配置されている。地域に豊かな緑の印象を与え、「花とおはなしできるまち」という本地区のテーマを象徴している空間となっている。花や緑は人が手をかけなければきれいに育たないので、NPO 北鴻巣はまちの自主管理活動として、毎月の公園整備イベントを行っている。当イベントでは、若い夫婦をはじめ子ども達から高齢者まで世代の域を超えて住民が集まる。お父さん達が垣根の剪定に励むなか、お母さん達はおしゃべりをしながらの花だんの草取りや花がら積み。子ども達は広い公園中を一輪車で仲良く元気に駆け回る。公園を介したイベント交流の中で、住民それぞれの役割と居場所が生まれている。そうして、公園を自分たちで集まって手入れをすることによって、花や緑の景色が育つだけでなく、住民それぞれが育っているように感じる。

また、これをきっかけに高齢者が外に出て活動する風景が見受けられる。花だんの草取りをしながら元気におしゃべりしている姿がそこにはある。高齢者がまちに出て、若い世代とまじって活動していけることが、健康や生きがいにつながっているように感じる。80歳になるNPO会員の関根さんは「私は子どもも主人も亡くなっているけれど、そんな中、5年もずっとこうやって誰かとおしゃべりできる取り組みをして幸せです。体を一番に考えて続けていきたいです」と仰っていた。

また、公園での取り組みと同様に、地域の中もきれいなまちなみ景観が保たれている。各住宅には通りに面しストリート花だんがあり、色とりどりの花や緑を見せる。公園を借景するだけでなく、公園に対して暮らしの中の彩りある景色を返している。

以上のように本地区では、土地区画整理事業の計画段階から描いたまちへの思いが着実に実現されている。「7つの思い（具体的なステップ）」における、6番目の項目は「つなぎ人」をつくること、そして最後の項目は「文化を育てる」ことだ。残りの2つは、現状に留まらない未来を見据えたステップだと言える。

2) 「協働活動（イベント）」を通じた自立

当社の考える「ひとづくり」における「住民の自立」という面からも、本地区の現状を検証したい。併せて、住民の自立によって起こった「まちづくり」への成果を実例から述べようと思う。

当社スタッフはNPO法人設立時から事務局として、協働作業（イベント）の企画やNPO運営に係る一切の事務手続きを行ってきた。しかし最近はずいぶん少なくなっているが、適正に応じた役割分担に基づき、NPO北鴻巣と住民達でイベント運営を進めている。

今回3回目の実施となる8月の「流しそうめんイベント」では、自主的にてきぱきと動くNPO会員や自治会の人々によって、準備・片付けをスムーズに行うことができた。竹組みの流しそうめん台を組み立てる福田さん、大釜でそうめんを茹でる婦人会、釜の番は矢島さん、そうめんをホースとバケツを使って冷やす榎本さん、こうして見ると、ひとつのイベントがいかにか自主的な協働作業で成り立っているかがわかる。他のNPO会員も、自分ができることは何か、自主的に考えてそれぞれの役割を担っていた。総じて見ると、回数を重ねることでそれぞれ得意な役割が生まれ、その継続によって、誰かの指示がなくても自主的に自分の役割を果たすことが可能になっている。

また、NPO北鴻巣はすみれ野中央公園における指定管理者の認定を受けた。公園整備イベント等の自主管理活動を通じて、自分たちの公園を主体的に管理してきた実績による認定である。新たに今年度からは、公園に隣接している駅前広場の管理を鴻巣市から受託することができた。こうして自分たちのできる範囲でまちの管理を行うための土壌が整ってきている。

3) 「協働作業（イベント）」の継続によって

NPO北鴻巣の活動目標は「去年までできたことを、今年もしっかり行うこと。そして、毎年1つずつでも良いから新しいことを増やしていくこと」だ。協働作業（イベント）が継続されれば地域の行事となり、いつか文化になる。だから、できることから始め、それを継続することが大事な行動だ。公園整備も当初は婦人会の小さな活動だった。草刈りや花がら摘みといった地道な活動だが、取り組む姿を見せ続けることで支援者が増えて今、NPO北鴻巣による公園整備イベントとなった。内容は同じことでも、多くの人々と協働して行うことで、いくつものおしゃべりや笑顔が生まれている。

また、協働作業（イベント）への参加を通して、少しずつ新住民にも自主的な動きを伺えてきた。今年度は公園整備イベントが雨に見舞われることが多かったが、自主的に傘をさして公園に訪れ、ゴミ拾いに励む若い夫婦が多く見えたのだ。少しずつではあるが、新住民にも自立の様子が見え始めている。

3. 次のステップ、「つなぎ人」づくり

まちへの思いが具現化され、まちや公園が維持管理される中で、自主的に活動する住民が増えてきた。だからこそ今後重要なことは、ここまで実現してきたまちの思いを、今後も実現し続けることだ。現在、日々の維持管理作業の多くは、NPO の初期メンバーによって支えられているのが実態である。また、NPO の運営やイベント企画に携わる正会員のほとんどが、その初期メンバーで構成されている。

今のままでは、将来にわたって取り組みを続けていくことが困難だからこそ、次世代への「つなぎ人」づくりが重要なステップとなる。つまり、新住民（若い世帯）の運営への参加である。イベントに参加するようになり、少しずつ自主性が生まれてきた新住民にも、運営に係わっていただけるような取り組みが求められている。

NPO の初期メンバーは、このまちを共につくってきた人々だ。思いや愛着を持って維持管理の作業に取り組んでいる。しかし、新住民は初めからまちや活動環境を与えられている立場だ。そんな新住民が、まちの思いを共有して、「つなぎ人」として受け継いでいける取り組みが必要である。

4. 課題への取り組み

1) 具体的取り組み「原点回帰、思いの共有」

当社では「つなぎ人」づくりの具体的取り組みとして、9月1日に小布施町の視察旅行を企画した。ここでは、NPO 北鴻巣が「花」をテーマにしたまちづくりが始める際に手本としたまちである。目的は、NPO 初期メンバーの原点回帰と、新たなメンバーとの原点の共有だ。つまり、初期メンバーが NPO 発足時の初心に帰り、かつ新しいメンバーがその思いを共有することである。そのため視察の内容は、小布施町で実施している「オープンガーデン」のオーナーとの交流とした。

小布施に対する感想で印象的だった言葉は、「小布施町は花のまちづくりを始めて 20 年。北鴻巣も 20 年経ったとき、こうなっていたい」「小布施の人々は本当に花が好きで、楽しんでやっているから続いている」というものだった。婦人部会の頃からまちづくり部会として公園の手入れを行ってきた矢島さんは、「作業を継続する中で、成果を発表できるイベントが続いていることが、日々作業する側としては必要。また頑張ろうと思うことができる」と仰っていた。これは、取り組みの継続において大事な要素である。

まちづくり部会とは、日常的に草取りや水やりを行う NPO 北鴻巣の実働部隊（維持管理部門）である。月 1 回の公園整備イベントだけで、公園の花や緑を維持しているわけではない。すみれ野中央公園の良質な景観は、まちづくり部会の方々による日々の手入れによって成り立っているのである。地道で体力を使う活動だからこそ、楽しんでやることや、成果を発表できる場が重要だということを感じた。初期メンバーであり、まちづくり部会である佐藤さんと薄田さんが「今日はあつという間だったね、また明日からよろしくお願いします」と声を掛け合っていたが、2 人のようなメンバーが今後も元気に活動を継続できるようなお手伝いをしたい。

2) 具体的取り組み「若い世代の育成（「つなぎ人」づくり）」

また、新住民への取り組みとして、秋に次世代目線を持ったガーデナーの先生をお招きし、若いお母さん世代を対象にした協働作業（イベント）を企画している。若い世代が、初めからまちづくり部会（花のベテラン）のように維持管理活動をすることは難しい。また、まちづくり部会の方々にとっても、若い世代に花について教えることは困難であった。そういったことから、第三者の先生による協働作業（イベント）の準備を行っている。

本地区の若い世帯は、多くの家庭が小学校低学年の幼い子どもを持つことから、NPO の運営に携わることが難しい現状だ。従って、子どもが中学生になる頃、すなわち 5 年後を見据えた若い世代の「ひとづくり」が必要となっている。しかし、子ども達が中学生になった時こそ、若いお母さん達はパートに出ていくという考えもある。この状況の中、どうやって「つなぎ人」をつくっていくか。今まさに NPO 北鴻巣は模索している。いずれにしても、「ひとづくり」は短期間で出来るものではないという考えで、将来を見据えた取り組みをしていきたい。

一方で、春には貸し農園の一区画を借りて、子どもたちによるサツマイモの植え付けを行い、秋には収穫の予定である。NPO 北鴻巣では、他にも流しそうめんやクリスマス会のように、子ども達のためのイベント企画が行われている。なぜなら、世代や年齢を越えた交流が子どもたちにとって、ふるさとの思い出となると考えて

いるからだ。いつか子どもたちが大人になってまちの外に出て行っても、いつか家族をつくってこのまちに帰ってくることで、まちがつながっていくと考えている。

3) 「つなぎ人」づくりを目指して

小布施視察を経て、新しい動きが生まれてきた。「NPO 北鴻巣の将来のあり方に関する検討委員会」(以下、検討委員会)の設置が検討され始めたのである。視察の感想に「目的はシンプルで『地域をより良くしよう』ということ。人によってできない人も多くいるが、それでも良い。好きな人が楽しく続けられるやり方が大事」というものがあつた。それを踏まえ、検討委員会では中長期的な視点に立って、将来的ビジョンやその機能の拡充等について、具体的方策等の検討を行うことを目的としている。

昨年度の決算総会(平成24年6月)から、徐々にNPOの中長期計画の必要性についての声も上がってきていた。まさに今、NPO 会員の中から自主的に将来に向けた取り組みが始まりつつある。

現在のメンバーと一緒に、いかに新しいメンバーを仲間に加えて自主性を育ていけるか、ということがNPO北鴻巣、そして本地区の立ち向かっている課題である。勿論、花や緑に携われる人だけを育てているわけではない。

実際にNPO会員の福田さんは「何でも屋のフクダさん」と呼ばれており、あらゆることで他の会員から頼られている。福田さんはNPO活動の中で、「みんなは『ああいうことをやったらいい』』と言うが、あまり実際に手を動かそうとしていない。自分がやると、すごいと言うが・・・」「楽しむことが続けること。そして、せっかくだからみんなの役に立ちたい」と仰っていた。まさにその言葉に、「つなぎ人」づくりのヒントがあるように感じる。なぜなら、誰もがはじめから自主的にまちのために活動できるわけではない。しかし、「まちのみんなの為に、なにができるだろう」と思えるように住民が成長していくことや、住民の個性豊かな役割を引き出せるような取り組みが重要だ。だからこそ、イベントと言う名のあらゆる協働作業を何度も続けているのだ。

4) 思いの広まりと実体験による確信

そんな中で、実際に少しずつ思いのつながりが広まっている。今年度新たに事務局長としてNPO会員となった一瀬さんは、NPO北鴻巣理事長の木村さんの紹介だ。会社を定年退職された一瀬さんは、NPOに参加することで「誰かの為に動きたい、何かを少しやってみよう、生きていこう!」と考えるようになったと仰っていた。一瀬さんは業務手順書やイベントの後の報告書を自主的に作成するだけでなく、事務局の業務以外にも自らまちづくり部会による公園整備のお手伝いをしてくれている。

また、先述した小布施町視察においては、私だけでは目標の参加者を集めることが出来ずにいた。視察に込めた思いに共感してくれた一瀬さんが再募集のチラシを作ってくれたり、榎本さんが自主的に参加者集めに動いてくれたり、思いを共有してくれた人が、その思いをもう1歩外側へと広げてくれたのだ。

まちづくりにおいて、反対の声は勿論どこからでも出てくる。しかし、それでも最初から「この指とまれ」で一貫したテーマを言い続けてきた結果、指にとまった人が集まっただけでなく、伝聞方式で人が人を呼び、思いのつながりが広まっているのだ。その確かな実感から、模索のなかでも活動を続け、思いをつないでいきたい。

5. 今後について(継続していくこと)

当社の目指すまちづくりや、本地区のまちへの思いは、一見すれば理想的でありきたりな言葉や概念である。しかし、実際にそれを具現化させる取り組みに携わってみると、いくつもの出来事・エピソードと巡り会う。その中で、ありきたりだった言葉や概念は、初めて現実となってきた。

全ての出来事は、土地画整理事業の当初からまちの在り方や、実現のための取り組みを考えてきたからこそ実現したものである。それは当社の先輩達が模索し、仕掛けてきたことだ。これに学びながら、実体験を基に、今後も本地区がつながっていくまちになるよう引き継ぎたい。そして、今後当社で「ひとのためのまちづくり」の仕事をしていく中でも、同様に思いをつなぎ広めることと続けることを大事にしたい。

私は本地区での活動を通して、「まちづくり(=ひとづくり)」に大切なことは、継続することだと感じている。一度実現したものを、新住民が加わる中で調整しながら続けていくことが求められている。その為には、まちの人たちと係わりの中で楽しみながら活動することが欠かせない。沢山の苦勞と喜びがあるまちづくりだが、みんな楽しんでという思いを広めて、つながっていくまちづくり(持続可能なまちづくり)にしたい。